

Title	英国道化の世界：笑いの造型
Sub Title	The world of English clowns : the creation of laughter
Author	小町谷, 尚子(Komachiya, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2017
Jtitle	Booklet Vol.25, (2017.) ,p.36- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	The expanding Shakespearean universe 3 道化 Fool 図版削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000025-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英国道化の世界——笑いの造型

小町谷 尚子

滑稽な格好や言動で人を笑わすことが道化の仕事である。ユーモアや機知をもって風刺することもあれば、自らが笑いの対象になることもある^{*1}。英国の宮廷においては、ヘンリー八世 (Henry VIII, 1491-1547) からチャールズ一世 (Charles I, 1600-1649) までの歴代の君主が、宮廷道化師 (court fool、のちに court jester という呼称が生まれる) と呼ばれるプロのエンターテイナーを召し抱えた。ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の『リア王』 (*King Lear*, 1602-04年) では、宮廷道化師のフル (Fool 道化) は王の愚行を皮肉り、王が荒野をあてどなくさまようときはその放浪の道連れとなり真実を告げる。黒澤明の翻案映画『乱』 (1985年) では、舞台は戦国時代に移され、狂阿弥 (道化) が狂言の所作や謡をまじえて秀虎 (王) を笑わせ、後には真実をつく戯言を放ちながら狂った秀虎のおもりをする。しかし、シェイクスピアの『リア王』を知る人も、日本の戦国時代のお伽衆や狂言について知る人も、その知識に照らせば、『乱』の狂阿弥に少なからず違和感を持ったに違いない。それはなぜだろうか。日本には英国の道化に合致する職掌がないからである。

道化は、シェイクスピアおよび彼の生きた初期近代の風土に根差す固有のキャラクターである。よって、道化の本質、道化の作り出す笑いの本質をその観点から見なくてはならない。また、英国と日本という土壌の違いだけでなく、時代の隔たりもまた道化や笑いの理解を難しくしていることを忘れてはならない。道化が活躍した英国においてさえ、後の上演では『リア王』のフルに限らず、他の作品の道化も台詞が大きく削減されたり、時に役そのものが消滅したりしたことがあった。そうした変更の理由は、異なる時代においては理解されがたい道化の働きであり、道化が笑いの対象とするものの違いなのである。

道化は初期近代の芝居では笑いの場面の中心人物として登場する。笑いが繰り広げられるくんだり喜劇だけではなく、悲劇にもある。喜劇では、人物の言動のずれや行き過ぎが笑いを生み出す。悲劇では、コミック・リリーフ (comic relief) を担う登場人物が深刻な場面に現れ、笑いをもって緊張を和らげ、息抜きを作り出す。いずれにおいても道化は観客に新しい視座を持たせる。一方、笑いそのものの種類も豊富である。現実社会での笑いの原因はソーシャルな

(social 社会的な)ものである。つまり、社会的にみて常軌を逸しているために面白いというものである。それを見た人が唖然とし、「あきれる」というような感情につながって笑いが起きる。思いがけない間違いや失敗も予期せぬ驚きをもたらし、意外性から笑いを引き起こすのである。だから日常の場に笑いはある。一方、舞台において観客の笑いを誘うものは二種類ある。一つ目は、ナラティブな (narrative 語りの) もの、つまり、ストーリーが面白いというものであり、二つ目はパフォーマティブな (performative 実演される) もの、つまり、動きや表情など視覚的に見て面白いというものである。前者のナラティブなものにはテキストの力がものを言う。後者のパフォーマティブなものは演じる役者に拠るところが大きい。ストーリーと動きの両方が合わさって可笑しさを生み出すこともある。

では、演劇において、道化が笑いをもたらす場面はどのように作られるのか。それを明らかにするためにはまず、英国の道化はどのようにして生まれて、どうして舞台から姿を消したのかを知る必要がある。50年ほどの期間にわたる道化の繁栄は、笑いに対する考え方の変遷とかかわるものであり、道化の理解に欠かせない。本稿では、テキストに収められた道化の性質と道化役を演じる役者の特質の両方を押さえながら、道化の作り出す笑いがどのように誕生し、認識されたかに迫り、道化を再考することを試みる。

1 道化の起源

20世紀の研究では、文化人類学的アプローチにより、異なる文化圏にみられる道化役——笑いを作り出す一方、個人や社会を嘲笑し批判する機能を果たす存在——を横断的に、かつ歴史的に俯瞰して共通項が分析された^{*2}。英国における道化師の伝統は二つに大別される。支配者層が雇った直言御免の道化師 (licensed fool) は自由な言動を公に許され、生まれつきの (先天的に) 愚かしい道化 (natural fool) は無意識に主人や社会の批判を行うことを大目に見られていた。ヨーロッパにおいては、古くから狂人が宮廷や貴族の家などに雇われ、患者 (fool) と呼ばれていた。患者はひょうきんことや間の抜けたことを言っただけで人々の笑いを誘う奇人であった。当時の貴族たちは、自分の患者への賞賛を自分自身への賞賛と考えていた。中でも、宮廷に召抱えられた患者は宮廷道化師と呼ばれ、社会的な差別・偏見を受ける特徴を自ら利用して笑わせていた。道化の中には、小人のように身体的な特徴によって人々の好奇心を掻き立てて楽しませる者もいたし、判断力や分別に欠けるなど異なる精神的世界を持つ者は、突拍子もない言動でその場の緊張を和らげた。おどけ者は閉鎖された宮廷での日常の憂さをひととき忘れさせてくれる存在として必要とされたのである。

こうした道化に必要な資質は、人をひきつける話術である。しかも、王侯貴族に仕えるからには、敬意をもって主人を批判することができなくてはならなかった。そうして、鋭い風刺の才でその場を引っ掻き回し、閉塞的な空間を解き放つ役割を果たした。すなわちプロの宮廷道化師はコメディアン、ダンサー、シンガー、ミュージシャンであるだけでなくコメンテーターでもあるマルチな

タレントであった。ヘンリー八世が寵愛したウィル・サマーズ (Will Summers, -1560) は純粹無垢な性質で王を癒していたとされ、エリザベス一世 (Elizabeth I, 1533-1603) が庇護したりチャード・タールトン (Richard Tarlton, -1588) は女王一座 (Queen's Men) の役者としても活躍した。ジェイムズ一世 (James I, 1566-1625) とその息子チャールズ一世 (Charles I, 1600-1649) はアーチボルド (略称アーチャー)・アームストロング (Archibald [Archy] Armstrong, -1672) という道化師を召し抱えていた。彼は 1637 年に王の怒りに触れて宮廷を追放になり、事実上英国の最後の宮廷道化師となった人物である。宮廷道化師の伝統のあった期間に王と道化のペアが描かれたことは、舞台の道化の形態的な起源の一つであることを示すと同時に、宮廷道化師の消滅とともに王の従者である道化が芝居に描かれなくなったことと関連する。

宮廷道化師の衣装は、鈴付きで先のとがった帽子と耳頭巾の被り物と、先のとがった靴が共通する。上着は、多くの場合まだら模様で、滑稽な頭部の付いた杖、道化棒を持っていた (図1)。王を光、道化を影とみる文化人類学的な読み方では、宮廷道化師が権力の座にある主人の愚かさを映しだす機能を持つことが注目された。そして、王笏と道化棒が二者の対照的な存在を象徴するものとされた。人間は主従関係においては主の意見に流されやすい。主人の意見が誤っていても異を唱えることができない。それを防ぐのに道化が一役かっていた。道化は場の空気を変え、凝り固まった意見をほぐす役割を担った。道化は愚かなまねをしてみせて主人が愚かな方向に進むのを抑えるブレーキ役となったのである。『リア王』のフールは、心理を見通して、冷静に観察・分析し、辛辣な言葉で、王国を分割するというリアの愚行を揶揄する。そのような特徴を持つ宮廷道化師は賢い道化 (wise fool) と位置づけられたり、カーニヴァルの無礼講の王 (Lord of Misrule) や祝祭の司祭としての働きがあると注目されたりした。誰からも何からも束縛されず、宮廷社会と一般民衆社会を自由に行き来するいたずら者、トリックスターとの読み替えも行われた*3。

図1 ウィリアム・フレデリック・イームズ < Staunch Friends (忠実な友人) > 1870年頃

一方で、イタリアのルネサンス期末期に流行したコメディア・デラルテ (Commedia dell'Arte) という喜劇の形式で登場するアルレッキーノ (Arlecchino, 仏:アルカン [Arlequin], 英:ハーレクイン [Harlequin]) と呼ばれる道化とも比較され、その特徴である即興的な演技の英国の道化への影響も分析された。さらに中世の道德劇の悪徳を寓意する悪玉ヴァイス (Vice) の系譜に道化を置くこともしばしば行われてきた。主人公を誘惑するヴァイスが道化役であったからである*4。

しかし、芝居には宮廷道化師やアルレッキーノといった伝統的な存在とは異なる特徴を備えたマイナーな道化も登場する。単純に機知に富んだ言葉を用い、面白い悪戯をすることにより、貧しい人の味方として民衆にも愛される人物、性格や気質がもたらす過度の言動が笑いを誘う人物、社会的地位にありながら失敗して威厳を失って笑われる人物や挿話的に登場する愉快な人物をメジャーな道化同様に類型化に収めて議論を終わらせてはならない。エリザベス朝の笑いを理解するためには、おどけた仕草やおふざけが特質の大衆受けする道化的な人物がどう描かれたかを再検討する必要がある。

その鍵は、初期近代に数多く出版された笑話集 (jest-books や merry tales) である。印刷技術が画的的に向上した 1500 年代半ば、冗談や笑い話を収めた笑話集が数多く出版された。笑話集には当時の有名な道化とされる人物や劇作家の名前をタイトルに持つものがあり、版を重ねている。また、同時代のパンフレット書きや宗教家が、読者の笑いを誘う目的で笑話集や道化役者に言及しながら洒落をもって記述していることなどから、英国の笑いの源流は、笑話集の伝統と道化役者の活躍とかかわりがあるとみてよい*5。しかも、笑話集に記された笑いを平面から立体的空間に置き換えたのが道化役者であるばかりか、笑話集のタイトルにもなった道化役者タールトンが女王一座の役者として名を馳せたことから、道化役者と笑話集の関連は小さくないことがわかる。道化役者と笑話集は互いに影響し合い、連動して発達し、芝居の道化に具現化したのである。したがって、書物と役者の二つの要素を併せてみれば、英国の道化の本質が明らかになる。

2 道化を形づくる二つのファクター

2-1 笑話集の道化

初期の笑話集では、笑いの作用は健康維持と結び付けられていた。1520 年ころに英国最初の笑話集『百の楽しい物語』(A Hundred Merry Tales, 1526) と『テイル・オイレンシュピーゲル』(Till Eulenspiegel, 15 世紀ドイツ) の英訳本『ハウルグラス』(Howleglas, 1515) が印刷されたが、『ハウルグラス』の序文には、笑いをメランコリーの治療法として用いると記されている*6。『百の楽しい物語』を元に編纂された『スコギンの笑話集』(Scoggin's Jests, 初版は 1576 年ごろ、1626 年版現存) の序文には笑いの効用を記すことが編纂の目的であると記されている*7。

こういった笑話集の類は 17 世紀初頭までおおむね肯定的に評価されていた。聖職者エドワード・デリング (Edward Dering, c. 1540-1576) は有害だと批判し

たが、枢密院の出入り織物商ロバート・レーンハム (Robert Laneham, fl. 1575) はケニルワース城でエリザベス女王をもてなす件について記した手紙で、いくつかの笑話集を価値ある愉快な本として挙げています。17世紀初頭出版された『ドブソンの辛口風刺集』(Dobson's Dry Bobs, 1607) は、副題で「スコギンの息子であり跡継ぎである」(“Sonne and heire to Skoggin”) ことを謳っている。笑話集の伝統が世紀を超えて受け継がれていたことがわかる^{★8}。

笑話集以外にも、笑いに治療効果をみた例がある。サミュエル・ローランズ (Samuel Rowlands, c. 1573-1630) は風刺詩『陽気な医者デモクリトスとメランコリー の 薬』(Democritus, or Doctor Merry-man His Medicines, Against Melancholy Humours, 1607) の書簡で、笑いにメランコリーから回復させる力があると記している^{★9}。トマス・ヘイウッド (Thomas Heywood, early 1570s-1641) は『役者弁護論』(An Apology for Actors, 1612) で、笑いの機能を「不安や心の負担を和らげる」(“to moderate the cares and heauinesses of the minde”) と記した^{★10}。フランソワ・ラブレール (François Rabelais, between 1483 and 1494-1553) と同じくモンペリエ大学で教鞭をとった内科医師ローラン・ジュベール (Laurent Joubert, 1529-1582) が1560年に著した笑いの理論は1579年にラテン語からフランス語に訳されたが、このジュベールの笑いの法則が、エリザベス朝の宮廷詩人ジョン・ハリントン (John Harrington, 1560-1612) の著作に対する批判本『エイジャックスへの反論』(Ulysses upon Ajax, 1596) で言及されたほか^{★11}、フランスの神学者シモン・ゴラル (Simon Goulart, 1543-1628) の『素晴らしい記憶すべき出来事』(Admirable and Memorable Histories, 英訳1607年) でも触れられている。これらの事実から当時の知識層が笑いの医学的な効用についての情報に触れ、高い関心を持っていたことがわかる^{★12}。神学者のウィリアム・パーキンス (William Perkins, 1558-1602) が1600年に教育目的で記した著書にも、笑話集がもつ癒しの効果が記されている^{★13}。17世紀になると、笑いに対する考えにはいくらか変化が生じる。トマス・デッカー (Thomas Dekker, c. 1572-1632) は『あなたを楽しくする冗談』(Jests to Make You Merry, 1607) で、冗談を「笑いのためにくべられる薪のようなもので、武器にも防具にもなりえ、笑わせる者、笑われる者両方を楽しませるもの」と定義している。さらに、デッカーは冗談を用いることは都会 (city ロンドン) で生き残るすべであり、それにより、他からの批判対象になることを避け、社会になじむことができると記した^{★14}。病を癒す薬から娯楽性による問題解決の手段へと笑いの用途は変化したが、笑話集の道化がもともと治療者としての側面を持っていたことに注目することは、道化に秩序の破壊者や批判者の役割をみる従来の読みとは一線を画すことになるだろう。

2-2 道化役者

治療としての笑いが書物に記されるようになったころ、時を同じくして、商業演劇が盛んになる。宮廷道化師が登場人物になると同時に、一般大衆に愛された笑話集の道化も舞台に利用されるようになる。これらを実体化させるのは道化役者であるが、このころ、天才的な道化役者が続けて登場する。タールト

ン、ウィリアム・ケンプ (William Kemp, -1603)、ロバート・アーミン (Robert Armin, c. 1563-1615) の三人が、シェイクスピアの道化造型に大きな影響を及ぼした。シェイクスピアの道化観はハムレットの役者論に示されている。城を訪れた旅役者に、父王殺害の状況とそっくりの筋立ての芝居を演じさせて叔父クローディアスの反応を見ようとするハムレットが、役者たちに演技の注文をつけ、それに続けて道化の演技について語る。

すっかり改めて欲しいものだ。道化役には書かれた科白以外は喋らすな。自分から笑って一握りの愚かな観客に笑いを強要するのがいる。そうする間に、芝居の重要な問いかけを考えることもできるじゃないか。これでは芝居は台無しだ、そんなことは馬鹿のやることだ。(『ハムレット』第3幕第2場、松岡和子訳)

ハムレットは道化の大げさな演技や即興の演技を禁じている。シェイクスピアがハムレットに語らせた道化像と実際の道化役者とはどのように異なるだろうか。

タールトンは演劇史に名を刻んだ道化役者で、パンフレット書きによって言及されたことから文芸誌にも名前が残った。シェイクスピアが宮内大臣一座 (Lord Chamberlain's Men) で劇作を始める前に、女王一座の旗揚げに参加したスター役者で、即興をよくし、ジグ (jig) と呼ばれる踊りに長けたダンサーでもあった。小太鼓と笛を演奏した図にあるように、この当時演奏に合わせて踊る演芸があった (図2)。また、死後に彼にまつわる楽しい話としてまとめられた笑話集『タールトンの笑話集』 (*Tarlton's Jests*, 『書籍出版業組合記録』 [*Stationers' Register*] への登録は1604年) は17世紀に版を重ねている。タールトンの個人的な話も含まれているが、実のところ、16世紀半ばに出版された先行笑話集から多くのエピソードを再録したものである。昔の笑い話がタールトンと意図的に関連付けられたことから、笑話集の笑いは舞台の道化の笑いと性質上重なり合う側面があると理解できる。さらに、それらのエピソードにみられる笑いの

図2 リチャード・タールトン *Tarlton's Jests* (『タールトンの笑話集』) 口絵 1640年頃

質が、笑話集と道化役者が並行的発展を遂げた短い期間に保たれたことをも示すだろう。他方、タールトンの名前が過去のものとなり笑話集が再版されなくなると、戯曲にも道化が描かれなくなるという末路に二者が同期的な関係にあることを見て取ることができる^{★15}。

ケンプは1599年まで宮内大臣一座の道化役者であった。彼もまたモリス・ダンス (morris dance) のダンサーとして有名であり、モリス・ダンスを踊りながらノリッジまで旅をした紀行記に、楽師の小太鼓と笛の演奏に合わせて踊っている挿絵が残っている (図3)。シェイクスピアの初期の道化的人物の多くは彼のために書かれたとも言われ、台詞の頭書きに登場人物の名前かわりにケンプの名前が記されているものもあった。『空騒ぎ』 (*Much Ado About Nothing*) のドグベリー (Dogberry) と『ロミオとジュリエット』 (*Romeo and Juliet*) の乳母の召使いピーター (Peter) がその実例である。その他、ケンプが演じたと推測されるものは、『恋の骨折り損』 (*Love's Labour's Lost*) のコスタード (Costard)、『夏の夜の夢』 (*A Midsummer Night's Dream*) のニック・ボトム (Nick Bottom)、『ヴェニス商人』 (*The Merchant of Venice*) のランスロット・ゴボー (Lancelot Gobbo)、ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) による『十人十色』 (*Every Man in His Humour*, 1598) のコブ (Cob) などがある。いずれも愚か者の召使いや田舎者で、滑稽味がその人となりに備わっているタイプの道化である。1600年ころまでのシェイクスピアの道化は、演じ手がケンプであったことも理由かもしれないが、素朴な笑いをもたらす人物が中心であった^{★16}。

ケンプが1599年にシェイクスピアの劇団を去ると、今度はアーミンが道化の役を演じた (図4)。多才なアーミンは自ら芝居を書き、宮廷道化師についての書物も著した^{★17}。アーミンがどのように演じたかは記録がなくわからないが、彼が演じたとされる役柄から、彼の道化がどのようなものだったかをうかがい知ることができる。『お気に召すまま』 (*As You Like It*) のタッチストーン (Touchstone)、『十二夜』 (*Twelfth Night*) のフェステ (Feste)、『リア王』のフー

図3 ウィリアム・ケンプ *Kemp's Nine Days Wonder* (『九日間の奇跡』) 口絵 1600年頃

図4 ロバート・アーミン *The Two Maids of More-Clack* (『モアクラックの二人の乙女』)
口絵1609年

ル、『終わりよければすべてよし』(*All's Well That Ends Well*)のラヴァッチ(Lavatch)、『トロイラスとクレシダ』(*Troilus and Cressida*)のサーサイテーズ(Thersites)、『マクベス』(*Macbeth*)の門番(Porter)、『アテネのタイモン』(*Timon of Athens*)のフール(Fool)、『冬物語』(*The Winter's Tale*)のオートリカス(Autolycus)などのアーミンが演じたと推定される役は、ケンプの演じた役柄とは大きく異なる。特に、フェステヤリアのフールは宮廷道化師で、知的な洒落や皮肉、ユーモアで風刺的な可笑しさを作り出す。アーミンはタールトンやケンプとは異なる役回りを求められた道化役者であったことがわかる。

3 笑話集のモチーフと芝居の道化

笑いの原風景は笑話集に求められ、そこには笑いの多様性の一端を見ることができ。笑いを起こす人物、あるいは笑われる人物に選ばれるのは、多くは、知能が劣る者、性格的に欠陥のある者、地位のある者、などである。それらの人物の、とっぴな行動や過失、共有しがたい思考、未熟さ、詭弁、勘違いが笑いの対象になる。同様に、芝居においても、これらの特質を道化やおどけものの登場する場面に見ることができる。

笑話集の題材の代表例に、ラテン語がわからないことによって引き起こされる混乱がある。学識があるとされる聖職者や若い学者がその風刺の対象となる。学者のスコギンやスケルトン(John Skelton, c. 1463-1529)、作家のジョージ・ピール(George Peele, 1556-1596)は主人公として最適であった^{★18}。牧師が学識のある修道士に復活祭にふさわしい説教について尋ねようと思って使者を送るが、その使者がRで始まるタイトルであることしか覚えていなかったために、牧師が復活祭用の説教(Requiem resurrexi)の代わりに死者のためのミサ用の訓話(Requiem eternam)を垂れて恥をかく話がある。シェイクスピアの『恋の骨折り損』で、学識を誇示しようとしてホロファニーズ(Holofernes)が難解なラテン語の羅列で笑いが生じる場面は、笑話集ではごく見慣れた光景だったの

だ。理解不能なラテン語はホロファニーズを笑いの対象とし、さらに意味もわからずにホロファニーズに感心する牧師サー・ナサニエル (Sir Nathaniel) をも笑いの対象にしている。可笑しさを倍增する常套手段としてラテン語が用いられ、笑話集の笑われる牧師のモチーフがここに響いている。

文盲による笑話を反映しているのは、『ロミオとジュリエット』の乳母の召使いでケンブが演じたとされるピーターである。ピーターはキャピュレット家で催される仮面舞踏会の招待客の名前が読めず、敵対するモンタギュー家のロミオ (Romeo) に読んでもらう。役に立たない使者は笑話集で頻出の題材である。ラテン語の説教タイトルを覚えられなかった使者をはじめとし、『恋の骨折り損』で言葉の間違いをおかす無学な田舎者コスタードなど、日常生活から生活感ある笑いを生む典型がここにある。

初期の笑話集『百の楽しい物語』、『スコギンの笑話集』、『スケルトンの笑話集』 (Skelton's Jests) のいずれにも、主人公がキジなどの野鳥を手土産に携えて領主などを訪ね、始まりを意味するアルファと終わりを意味するオメガという二羽の鳥の名前をシャレに使う領主をからかう話がある。このモチーフは広範な利用の可能性を持っていた。シェイクスピアでは『タイタス・アンドロニカス』 (Titus Andronicus) の道化 (Clown) の例がある。道化はタイタス (Titus) の手紙と二羽のハトを携えてサターナイナス王 (Saturninus) を訪ねるが、タイタスとのやり取りでは、言葉を聞き間違っただけを繰り返す。

タイタス ようし、いいぞ、神よ、皇帝陛下に歓びを与えたまえ。

道化、二羽の鳩を入れた籠をもって登場。

知らせだ、天からの知らせだ！ マーカス、伝令が来た。

おい、どんな知らせだ？ 手紙はもってきたか？

正義は下されるのか？ 大神ジュピターは何と仰せだ？

道化 オオカミ？ あ、オオカミみてえな首吊り役人のことか、だったら縄ははずしたって話ですぜ、死刑は来週まで延期になったんで。

タイタス いや、俺が聞いているのは天の神ジュピターの返事だ。

道化 旦那、あいにくあつしはジュピターって人とは付き合いがねえ、これまで一緒に飲んだことも一度もねえんで。(『タイタス・アンドロニカス』 第四幕第三場、松岡和子訳)

ハトの名前が出てこなくても、ここには笑話集で見慣れた道化の姿、二羽の野鳥を手土産に支配者層の人物を訪ねるという構図の挿入を見ることができる。ここにも、パフォーマンスな笑いが作り出されている。しかも、道化は死刑について言及し、このやり取りの後実際にサターナイナス王に絞首刑を言い渡される。絞首刑を執行される者が首に木杵をつけて登場する話も笑話集ではよく出てくる^{★19}。『タイタス』の道化は定型のモチーフを二つ合体させたものである。一方、『ヴェニスの商人』では、主人替えをしようかと迷っているランスロット・ゴボーは、父親の老ゴボーが籠に調理した山鳩を持って息子の主人シャイロック (Shylock) に会おうとやってくる所に出くわす。やり取りの後、決心の固まったランスロットはバサーニオ (Bassanio) に奉公を願い出て、父親がシャイロックへのおみやげとして用意した山鳩を新しい主人に差

し出す。笑話集の主人公は野鳥を使って立場を逆転させたが、『ヴェニスの商人』のランスロットが山鳩を手土産にするくだりも、主人替えの転換の場面として機能している。本筋と類比的な関係を保ちながら、単発的に挿入されているとみることができる。

さらに、空を飛べるという大嘘にだまされて見物に集まった群衆をからかう“false flight”のテーマは、『カーレンベルクの牧師』(*The Parson of Kalenborow*, 1520)、『ハウルグラス』、『スコギンの笑話集』に見られ、ジョン・リリー (John Lyly, c. 1553 or 1554-1606) の『カンパスペ』(*Campaspe*, 1584)において笑いのモチーフとして取り入れられている^{★20}。後述するように、このテーマは複数の作家が枠組みを変えて用いているが、初期近代の観客にはおなじみのモチーフであった。

ヘンリー・ピーチャム (Henry Peacham, 1578-1644) の少年の日の観劇体験の回想に、3人の息子を持つ裕福な老人が臨終の床で息子たちとやり取りする場面でもくでなしの三男をタールトンが演じたと記されている。この逸話も笑話集のモチーフである。マーティン・ウィギンズ (Martin Wiggins) が“Play with a Deathbed Scene”の項目で『百の楽しい物語』を材源として挙げている^{★21}。この芝居は女王一座のレパートリーにあり、1585年ピーチャムが7歳のころに上演されたものと推測される。世代間ギャップを背景にした財産わけ、知恵と無経験、親の深慮と若い熱情の対比のテーマは、デッカーの『オールド・フォーチュネイタス』(*Old Fortunatus*, 1599)にある逸話、“Crack Me This Nut” (1595, Admiral's Men)、リア王の王国分割話に見られ、当時好まれたモチーフであったことがわかる。『百の楽しい物語』の逸話は、タールトンが演じた芝居に限らず再利用されていたのである。

『空騒ぎ』でベネディック (Benedick) によってベアトリス (Beatrice) の機知 (wit) は『百の楽しい物語』と関連付けられている^{★22}。この比喩的な言及のみならず、笑話集から芝居に入った笑いの実体化したものと、ケンプの演じたドグベリーはごく初期の素朴な形をとどめている。夜警との絡みのくだりがあるが、夜警は笑話集で常連の登場人物である。笑い話のモチーフは芝居に組み込まれた時、うってつけの配役で笑いの威力を増したのだ。

また、『悪党を知るコツ』(*A Knack to Know a Knave*, 1592) のタイトルにはケンプが中間劇 (interlude) でゴサム村の村人を演じたことが副題に記されている。愚かな住民が王様に醸造の許可を求めるとは、『百の楽しい物語』や『ゴサム村の狂人』(*The Merry Tale of Mad Men of Gotham*, 1630) に記された定番の笑い話からアイデアを借ったもので、スター道化役者ケンプが演じることが一つの呼び物であったことは想像に難くない^{★23}。道化の場面は笑い話を単に借用しただけのものではなく、笑い話の発想、趣向と道化役者の個性を意識的に取り入れたものであり、これこそ、初期近代の芝居における道化の本質を語るものである。

4 笑い話のリノベーション

笑いを起こす人物と行動・状況の組み合わせによって、種々の笑いが作られ

る。しかし、笑いはこの組み合わせだけで引き起こされるものではない。笑いを起こす行動は、大別して、他者の行動に対する反応が引き起こす笑い、他者への働きかけによる笑いの二つに分けることができる。そして、話の構成や目で見て分かるようにする視覚化からも笑いは生み出される。舞台上の笑いの作られ方の変化は笑話集の変遷と連動している。

『スコギンの笑話集』は1613年に続編が出版されているが、本編の出版と50年強の隔たりの間に、笑いの作られ方に違いがみられる。本編の主人公スコギンは、オックスフォードの学者で英国宮廷のジェスターである。彼の冒険は、同輩から聖職者、商人、そして、宮廷では王、女王の取り巻きとのかかわり合いの中で起こり、笑いの種はごく日常的なものである。いくつかのエピソードにおいては、スコギンの自らを省みる言動が面白みを作り出している。主人公の内省が笑いに大きくかかわるのである。それに対して、続編は舞台をイタリアに変え、聖職者のしきたりや習慣を揶揄することで笑いが作り出される。遭遇する事柄を陽気な冗談で処理する形を取り、散発的である。配列によるまとまりが与えられているものの、段階的な発展のあるストーリー性はない。また、女性たちがスコギンの好色の餌食になる。それは聖職者をからかう話と相乗効果をなして、主人公の型破り・常識破りの奔放な生き方を強調する。1500年代半ばと1600年以降に再編された笑話集に見られるこの違いは芝居における道化の場面の変化にも通じる。初期の道化が登場する場面は、転換のきっかけ、事件の予兆にもなったのに対し、のちの道化は本筋とは結びつかない、挿話的に笑いを取る効果として用いられるようになっていく。

では、舞台における笑いの仕掛けについて考えてみよう。芝居においては、笑い話の道化の姿を彷彿とさせながら、道化が笑いの対象を転嫁していることを指摘したい。これを確かめるのに、前述した“false flight”のモチーフが手掛かりになる。いずれのテキストにおいても、高いところから飛んでみせるという大げさなホラ話の種明かしがあるが、その処理の仕方に、笑いの作り方の違いがみられるのである。

『カーレンベルクの牧師』と『ハウルグラス』では、主人公の牧師あるいはハウルグラスは空を飛んで見せると広言する。見物しようと集まった村人に両腕を大きく振って見せるが、「翼も羽もなければ飛べるわけがない、皆さん方はだまされたのだ」とあざける。あり得ない事柄を期待して待った村人は愚弄されるが、豪語した主人公の言うことはもっともだ、一杯食わされた村人が認識することで、笑いが起きる^{★24}。

一方、これらより後に編纂された『スコギンの笑話集』では、スコギンはフランスにいて、自分は英国に飛んで戻ると人々に信じ込ませる。しかし、人々が集まると、飛行を2度も翌日に延期する。一向に飛ぼうとしないスコギンに業を煮やしたフランス人が自分こそがパリに飛ぶと言って失敗して濠に落ちると、「おかえりなさい。パリは雨だったようですね」とずぶ濡れのフランス人をからかう。スコギンの笑いの段取りと、それにまんまとのったフランス人へのコメントが笑いを作りだしている^{★25}。

『カンパスベ』のエピソードでは、哲学者ディオゲネス (Diogenes) は塔から

飛ぶと約束してアテネの村人を集める。ディオゲネスは長々とスピーチをしたあげく、人々が自身正直であることを証明できなければ飛ばないと主張し、逆に群衆を非難する。ディオゲネスが村人をはじめ、さらに、機知によって自らの危機を回避することがおかしみを作り出す。だまされたアテネ人の愚かさどりましたディオゲネスの機知を観客は楽しむのである^{★26}。

これらの結末は「誰が誰をあざけり、何があざけりの対象となり、愚行がどのように文脈に収められているか」という点で異なる。笑いの対象を転嫁する話は劇においてはよく見られる工夫であるが、笑話集における例として、『スコギンの笑話集』の逸話がある。主人のスコギンから「1ペニーで4尾のニシンを買ってくるように」と頼まれたジャックは1ペニーで3尾のニシンしか手に入れることができない。お使いを果たせなかったジャックは1ペニーをスコギンに返し、自分のお金で買い求めたことになったニシンを食べる。スコギンが「ニシンを一尾分けてくれ」と言うと、ジャックは1ペニーのお代を要求する。さらにやってきたお客に対してニシンを食べたことに見栄を張りたいスコギンが「ニシンの骨を自分の前に置いてくれ」とジャックに頼むと、ジャックは骨代として1ペニーを支払うよう返答する。ニシンを巡ってジャックに痛い目を見せたスコギンのケチさが的を変えてスコギン自身に返ってくる。ニシンを食べられないばかりか、分けてもらおうとすると一尾に1ペニーという値段をつけられる、さらに、お客に対して面目を保つための骨代としても1ペニーを請求されて、スコギンは二度もジャックの懲らしめの犠牲者となる。しかし最後に、スコギンがお客に「もっと早く来ていれば夕食に新鮮なニシンを御馳走しましたのに」と言うとき、スコギンとジャックのユーモラスな応酬が客観視される^{★27}。このエピソードには、狡猾な年少者ジャックが知識人の年長者スコギンをやり込めてぎゃふんと言わせたという第一段階の笑い、スコギンの訪問者へのやり取りで一層ケチぶりが浮き彫りになる第二段階の笑いがあり、両方の仕掛けで、ジャックにはめられた主人スコギンの反応に対して笑いが起きるのである。ここにみられる、立場の逆転とその繰り返し、さらに、笑いを起こす行為の客観視は芝居においても観察されよう。笑い話から照射して主従の力関係の描き方を見直せば、奥行きのある道化の本質が説明できるだろう。そして、笑話集の変化が道化の変容の理解につながるものだということが確認できる。

さて、枠組みや仕掛け以外にも、様々な笑いの視覚化が行われ、そこに笑話集の影響をみることができる。『ヴェローナの二紳士』(*Two Gentlemen of Verona*)のランス(Lance)の即興のモノボケ、道具を使って視覚に訴えるたとえが良い例であるが、そこへさらに人間たちの悲しみを涙ひとつ流さず眺めている犬のクラブ(Crab)の視点加わることで、重層の笑いが作り出されている。ランスはプロテウスの召使いになることが決まったが、最初の登場で、犬を連れて現れひとしきり嘆く。

いやいや、泣いて泣いて涙が^か潤れるまで、あと一時間はかかるだろう。俺の親兄弟ランス一族にはこういう欠点があるんだ。俺は、聖書に出てくる放浪息子みたいに、自分の分どり財産もらって、プロローティアス

様のお供をしてミラノ大王の宮廷に行く事になった。なのに、このクラブってやつは、とんだひねくれ者だ。おふくろは泣き、親父は嘆き、妹はシクシク、女中はオイオイ、猫は両手をしばり、家じゅうが上を下への大騒ぎなのによ、この血も涙もない犬つころときたら、涙一滴こぼさない。こいつは石だ、玉砂利だ、犬畜生なみに冷酷なんだ。俺たちが別れるところを見ればユダヤ人だって泣いただろう。いいか、目の見えない俺のばあちゃんは、目が潰れるまで泣いたんだぞ、別れが辛いってな。どんなふうだったか見せてやろう。この靴が親父だ。いや、親父はこっちの左の靴だな。あ、いやいや、左の靴はおふくろだ、いや、違うな。いや、うん、いいんだ、いいんだ、こっちの靴底の方が心の底なみにお粗末だからな。ほら、穴があいてるだろ、だからおふくろだ。で、こっちは親父だ。こん畜生、手間かけさせやがって！ よし、これでいい。でもって、この杖が妹だ。だってさ、見ろ、妹は百合みたいに色白で、杖みたいにほっそりしてるからな。この帽子は女中のナンだ。俺が犬だ。いや、犬はこいつ自身で、俺は犬。おーっと、この犬が俺で、俺は俺自身。ま、いいか、いいか。さてそこで、俺は親父んとこ行って、「親父さん、祝福を」と頼む。ところがこの靴は泣くばっかで、ひと言も言わない。で、俺は親父にキスをして——親父は泣き続ける。今度はおふくろんとこに行く。ああ、おふくろには滅多矢鱈にしゃべってほしかったなあ！ とにかく俺はおふくろにキスする。な、こうだ、うう、臭い息だなあ。お次は妹だ、ひーひーと泣きの涙だ。ところが、この犬ときたら、そのあいだずっと一滴も涙もこぼさず、ひと言も口をききゃしない。見ろ、俺の涙で土ほこりがおさまったぜ。(『ヴェローナの二紳士』第二幕第三場、松岡和子訳)

ランスは両親をボロ靴に例え、妹を杖にたとえ、大泣きする家族を表現する。そこには、犬のクラブが主人のランスの一人芝居を見ているという光景が加わり、しかもランスが自分と犬を交換可能にしている、犬の視点から一人芝居のばかばかしさを客観視して見せているので、二重に可笑しさが作り出されている。ここでは前述のスコギンとジャックのニシンのエピソードに見られたような工夫が舞台化されているのである。

『じゃじゃ馬馴らし』(*The Taming of the Shrew*)では、酔っ払いのクリストファー・スライ(Christopher Sly)の夢の話が導入となっている。夢がオチになる笑い話は『物語と素早い応答』(*Tales and Quick Answers*, 1535)にも収録されている*28。身近な笑い話の枠に入れ子構造で妻を調教する笑い話を収めた物語は、虚構と実体が融合して笑いを重層化する仕掛けである。二つの笑いの伝統を結びつけるインダクシオンの場面が上演されないことがあるのは、残念なことと言わねばならない。

『夏の夜の夢』で、ロバに変身させられたボトムが妖精の女王タイテーニア(Titania)との恋を夢だと思ふ。これは劇中劇ではなく、実際に起こったストーリーとしてプロットに組み込まれている。ロバへの変身は可笑しさを表層で視覚化したものであるが、実体を持たせる手段としても機能している。動物の皮

をかぶるモチーフもまた笑話集でよく使われる。その話の背景により、オオカミになったりクマになったりと動物の種類こそ変わるが、現実感を持たせる仕掛けとして用いられる。オヴィディウスの『変身物語』の影響を読み取ることも可能であるが、笑話集のほうがずっとエリザベス朝の観客に身近ではなかっただろうか。

変身と言えば、『十二夜』でフェステが牧師サー・トーパス (Sir Topas) に化けて、女主人オリヴィア (Olivia) の執事でいけ好かないと嫌われるマルヴォーリオ (Malvolio) をだます場面がある。『スコギンの笑話集』には司祭に化した主人公が村人をだます話がある^{*29}。サー・トーパスはジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer, c. 1343-1400) の『カンタベリー物語』 (*The Canterbury Tales*, 初版 1478 年) に登場する臆病な騎士の名前であり、リリーの『エンディミオン』 (*Endymion*, 1588 年初演、1591 年出版) に出てくる大ぼら吹き of 兵士の名前でもある。一致するのは全員ひげを生やしているということである。

マライア　いいこと、このガウンを着て、この髭をつけて。あんたが牧師のトーパス先生だってあいつに思い込ませるのよ。急いで。そのあいだに私、サー・トービーを呼んでくるから。(退場)

道化　さてと、こいつを着て化けるとするか。こういうガウンで人を化かすのは、残念ながら俺が初めてじゃない。俺は牧師に見えるには背が足りないし、学者としては痩せ方が足りない。ま、痩せたソクラテスとか偉い学者と言われりゃまんざらでもないが、人づき合いのいい立派なお大尽と言われるのもいいよな。相棒たちの登場だ。

．．．

マライア　髭やガウンはなくてもよかったわね、どうせ見えないんだもの。(『十二夜』 第四幕第二場、松岡和子訳)

フェステが笑話集で常連の滑稽で胡散臭い牧師を演じるのは、マライア (Maria) が言うように、芝居の中の人物に向けてではなく、実は観客に向けてである。気取ったマルヴォーリオがのせられて黄色いストッキングを履く場面はばかばかしさを単純に視覚化したものであるが、フェステの変装は、先行する作品に出てくるような、臆病ゆえに大げさな支度をする騎士、あるいは大ぼら吹き of 兵士を投影しつつ、笑い話の怪しい牧師を二重写しにしてみせる工夫となっている。こうして、笑話集でよく知られた扮装や行為は、観客を同時代の笑いを共有する見物人として劇の世界に引き込む。そして、マライアの「髭もガウンも必要なかった」という台詞は、扮装が合理的でないことを念押しし、この場面の可笑しさを客観化している。この後にさらに続くマルヴォーリオいじめは、残念なことに上演の際にカットされることが多い。まじめで慥無礼なマルヴォーリオをひやかすためにピタゴラスの靈魂輪廻説 (靈魂が鳥に宿するという説) をめぐって問答するくだりは、エリザベス朝の観客の心をつかんでも、後世の観客には時代遅れで面白いとは感じてもらえないからであろう。道化の登場場面で、パフォーマンス的な面白さが生かされ、ナラティブな面白さが省かれがちである理由がここにある。

5 笑話集のさらなる書き換えと道化の変容

1600年代に入ってから編纂された『タールトンの笑話集』の逸話はどれも単発的で、笑いの起きる状況を楽しむタイプのものである。これもまた芝居における挿話的な道化の性質、あるいは、『マクベス』の門番のように観客とのインターフェイスになるような道化の性質に重ね合わせることができる。

『冗談の宴会』(*A Banquet of Jest*, 初版1630年)では、道化の名前はもはやタイトルには含まれない。序文にアーチャー・アームストロングの名前を入れていかにも筆者であるかのように装った版もあるが、内容はアーチャーに関係のないもので、エピソードは『タールトンの笑話集』よりもさらに簡略化されている。セット物はなくなり、一貫した流れもない。面白いフレーズを提示したテーブル・トーク集で、ロンドン居住者の雑談のためのモデルとなった。初期笑話集は共同体の炉辺物語であったが、今や笑話集は都市の紳士のための話題提供・ユーモア指南本となっている。そうすると当然、シティー・コメディ(city comedies)に取り上げられるような状況や人間関係がその題材となったこともうなずける。時代が変わると道化が理解されなくなるのは、道化が醸し出す笑い、とりわけ語り上の笑いを受け止められなくなるからである。笑話集から道化の主人公がいなくなると同時に舞台の道化も姿を消していくのは単なる偶然ではない。実際、1600年代半ばになると、笑話集の主人公は王党派の民衆扇動家でおいはぎのジェームズ・ハインド (James Hind, 1616-1652) のような波乱に富んだ人生を送る実在人物にとって代わり、笑話集はその愉快な冒険譚や一代記の体裁をとる^{★90}。主人公は、後のピカレスク小説の主人公に似るが、こういった笑話集の変化に伴って道化は芝居から姿を消していく。

道化的人物に悲劇性から日常性に引き戻す役割をことさら見ようとする過去の試みからは、上述の17世紀に入ってから道化的人物の変容を説明できない。ケンプが劇団を去る1599年を境に、シェイクスピアの喜劇における道化の性質が変わったことはこれまでも論じられてきたが、道化役者の交替を理由とするだけでは片手落ちである。書物に記された道化的人物の変容が喜劇の枠組みに及ぼした影響を併せて分析すれば、これまでとは異なる読みが可能であろう。

これまで見てきた影響は書物から舞台へというベクトルの向きであった。print から performance へ、あるいは page から stage へ、という視点での研究は今盛んである。しかし実は逆向きのベクトルもある。タールトンは笑話集にとどまらず、詩の題材となり、のちの劇にも伝説の役者として触れられた。三次元の舞台から二次元の平面に記録された道化役者であり、ここには舞台から書物へというベクトルがある。道化役者が媒介となり、笑い話と芝居のテキスト間の双方向のやり取りによって、あるいは、テキスト化と上演の循環によって、道化という文化が花開いたとみることができる。

6 まとめ：道化再考

人は人生において困難にぶつかり、悲しみにふけったり、悩み苦しんだりする。それらが見方を変えれば滑稽に思われることを記したのが笑話集、演じて

笑わせるのが道化である。シェイクスピア時代に特有のこの登場人物こそ当時の笑いを素直に伝える人物である。笑話集に収められた笑い話は初期近代の芝居における笑いや道化の単なる材源ではなく、笑いの仕組みを解明する手がかかりである。笑話集は書き換えられ再利用される柔軟性を備え、劇作家に自在な仕立て直しを許した。笑話集を受け継ぐ土壌は道化を育む土壌でもあったのである。初期近代の空気を伝える笑話集の特質を色濃く残した挿話的な道化がいかに劇作品の中に溶け込んだかを追えば、テキストの読みが深まり、ひいては演出の可能性が広がるのである。

註

☆1——芝居においては主要な登場人物が滑稽なふるまいをすることがあるが、本稿では専門の道化役、またその演じた役柄に焦点を絞って分析を加えるものとする。

☆2——基本書として以下のようなものがある。Enid Welsford. *The Fool: His Social and Literary History* (London: Faber and Faber, 1935) [邦訳：イーニッド・ウェルズフォード、『道化』内藤健二訳、晶文社、1975年]；William Willeford. *The Fool and His Scepter: A Study in Clowns Jesters and Their Audience* (Chicago: Northwestern University Press, 1969) [邦訳：ウィリアム・ウィルフォード、『道化と笏杖』、高山宏訳、晶文社、1983年]；Sandra Billington. *A Social History of the Fool* (Brighton: Harvester, 1984) [邦訳：サンドラ・ピリントン、『道化の社会史—イギリス民衆文化のなかの実像』、石井美樹子訳、平凡社、1986年]。

☆3——シェイクスピア劇における祝祭の要素については、C. L. Barber. *Shakespeare's Festive Comedy: A Study of Dramatic Form and Its Relation to Social Custom* (Princeton: Princeton University Press, 1959) を参照。文化人類学的アプローチを取り込んだ論考としては、Louis Montrose. "The Purpose of Playing: Reflections on a Shakespearean Anthropology." *Helios*, 7: 2 (1980), 53-74 を参照。先駆的研究として、Robert Weimann. *Shakespeare and the Popular Tradition in the Theater: Studies in the Social Dimension of Dramatic Form and Function*, trans. by Robert Schwartz (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1978) [邦訳：ロベルト・ヴァイマン、『シェイクスピアと民衆演劇の伝統—劇の形態・機能の社会的次元の研究』青山誠子、山田耕士訳、みすず書房、1986年]がある。とりわけ、カーニヴァルの要素に着目した研究として、Michael D. Bristol. *Carnival and Theater: Plebeian Culture and the Structure of Authority in Renaissance England* (New York: Routledge, 1985) が網羅的である。また、代表的論考集として、Ronald Knowles, ed. *Shakespeare and Carnival: After Bakhtin* (Basingstoke, Hampshire: Macmillan Press, 1998) [邦訳：ロナルド・ノウルズ編、『シェイクスピアとカーニヴァル』、岩崎宗治他訳、法政大学出版局、2003年]がある。

☆4——Welsford、および Weimann 参照。

☆5——伝説的な道化役者タールトンの名前は読者を説得したり関心を持たせたりするために繰り返し利用された。その経緯については、拙稿「出版物上のタールトン——脱神話化から再史実化へ——」慶應義塾大学日吉紀要『英語英米文学』61号(2012年10月)、87-105頁を参照されたい。

☆6——Anon. *A Hundred Merry Tales* ([London: J. Rastell, 1526?]) ; Anon. *Howleglas* (London: W. Copland, 1555?). 以下、初期近代の出版物の書誌情報の詳細は参考文献リスト参照。

☆7——『スコギンの笑話集』の序には次のように記されている。“a preseruatue against melancholy,” “mirth is so necessary a thing for man [...] to make men merrie,” “auoiding pensiuenesse, or too much study or melancholie, to be merrie with honesty in God, and for God.”『スコギンの笑話集』は、1576年の版が初版であるが、1626年の医師 Andrew Boorde の作として出版された版が残っている。Andrew Boorde. *Scoggin's Jestes* (London: Francis Williams, 1626). 1613年の続編は作者不詳である。Anon. *Scoggin's Jestes* (London: Raph Blower, 1613) .

この二つの版についての議論は拙論、「二つの *Scoggin's Jestes*: 異なる版が語ること」慶應義塾大学日吉紀要『英語英米文学』65号、2014年10月、45-85頁を参照。

☆8——Edward Dering. *A Brief & Necessary Instruction* ([London: J. Awdely], 1572), sigs. A2-A3; Robert Laneham. *A Letter* (London: s.n., 1575), pp. 33-34; Anon. *Dobson's Dry Bobs* (London: Valentine Simmes, 1607), sigs. A3-A3v. Shakespeare の『ヘンリー4世第2部』第3幕第2場で、Shallow が Falstaff をスコギンになぞらえている。“The same Sir John, the very same. I see him break Scoggin' head at the court gate when a was a crack, no thus high” (*Henry IV, Part 2*, 3.2.28-30) 以下、シェイクスピアの作品の原文からの引用はすべて、William Shakespeare, *The Complete Works*, ed. by Stanley Wells and Gary Taylor (Oxford: Clarendon Press) に拠る。

☆9——Samuel Rowlands. The Epistle “Honest Gentle-men,” in *Democritus, or Doctor Merry-man* ([London] : Printed [by William Jaggard] for John Deane [etc.], [1607]), sig. A3v.

☆10——Thomas Heywood. *An Apology for Actors* (London: Printed by Nicholas Okes, 1612), sig. F4.

☆11——Laurent Joubert. *Treatise on Laughter*. Trans. by Gregary David De Roher (Alabama: University of Alabama Press, 1980). ジョン・ハリントンは『エイジャックスの変身』(*The Metamorphosis of Ajax*) でエイジャックスと名付けた水洗トイレの発明について記したが、その利用者である女王を揶揄し、政府に対する批判を行って宮廷追放となった。Misodiaboles と名乗る作者による『エイジャックスへの反論』は、ユリシーズの名をタイトルに用いて、ハリントンの『エイジャックスの変身』に反駁を加えたものである。John Harington. *Metamorphosis of Ajax* (London: Richard Fields, 1596). Misodiaboles. *Ulysses upon Ajax* (London: Thomas Gubbins, 1596), sigs. F3-F3v.

☆12——Simon Goulart, *Admirable and Memorable Histories* (London: George Eld, 1607).

☆13——William Perkins は笑話集の類を気晴らしや不安解消に用いる理由を記している。“To all ignorant people that desire to be instructed: That merrie ballads and books, as Scogin, Bevis of Southampton, &c. are good to driue away time, and to remooue heart-quame” (*A Golden Chain* ([Cambridge] : Printed by John Legatt [etc.], 1600), p. 1027).

☆14——Thomas Dekker. *Jests to Make You Merry* (London: Imprinted by N[icholas] O [kes] for Nathaniel Butter [etc.], 1607), p. 1 (sig. B1).

☆15——書物に残るタールトン伝説の軌跡については、拙稿「出版物上のタールトン」を参照。

☆16——役者たちの演じた役柄の変遷を通してシェイクスピアの道化についての考察は、David Wiles が行っている。*Shakespeare's Clown: Actor and Text in the Elizabethan Playhouse* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987).

☆17——Armin の宮廷道化師についての記述は、*Fool upon Fool* (London: Printed [by E. Alde] for William Ferbrand [etc.], 1600) と再出版の *Fool upon Fool* (London: Printed [by W. White and S. Stafford] for William Ferbrand [etc.], 1605)、および焼き直した版 *A Nest of Nimmies* (London: John Deane, 1608) 参照。劇作品は *The*

- Two Maids of More-Clack* (London: Printed by N [icholas] O [kes] for Thomas Archer [etc.], 1609) がある。
- ☆18—Anon. *The Merry Tales of Skelton* (London: Thomas Colwell, [1567]) ; Anon. *Peele's Jests* (London: Printed by Nicholas Okes for Francis Faulkner and Henry Bell [etc.], 1607).
- ☆19—原文は、“Ho, the gibbet-maker? He says that he hath taken them down again, for the man must not be hanged till the next week” (*Titus Andronicus*, 4.3.80). 笑話集には、wag-halter (木杵) をつけられた人物の小話が多数ある。
- ☆20—Anon. *The Parson of Kalenborow* (Antwerp: J. van Doesborch?, ca. 1520) ; *Howleglas*; *Scoggin's Jests* (1626) ; G. K. Hunter and David Bevington. eds. *Campaspe and Sappho and Phao*, *The Revels Plays* (Manchester: Manchester University Press, 1999).
- ☆21—Henry Peacham. *The Truth of Our Times* (London: Printed by N [icholas] O [kes] for James Becket [etc.], 1638), pp. 103-05 (sigs. F4-F5). Martin Wiggins. *British Drama 1533-1642: A Catalogue* (Oxford: OUP, 2012), p. 780. さらに、Lost Plays Database の “Lord and his Three Sons, A” 参照。<https://www.lostplays.org/lpd/Lord_and_his_Three_Sons,_A>.
- ☆22—原文は、“That I was disdainful, and that I had my good wit out of the Hundred Merry Tales — well, this was Signor Benedick that said so” (*Much Ado About Nothing*, 2.1.119-21).
- ☆23—Anon. *A Knack to Know a Knave* (London: Imprinted by [ie. for] Richard Jones [etc.], 1594) ; Anon. *The Merry Tales of Skelton*; Boorde, *The Mad Men of Gotham* ([London] : Imprinted [...] by Thomas Colwell, [1565]), Tale 1; *A Hundred Merry Tales*, Tale 24.
- ☆24—Anon. *The Parson of Kalenborow* (Antwerp: J. van Doesborch?, ca. 1520) 中の “How the parson sold his wine” の小話、および *Howleglas* の Tale 10 に含まれる。
- ☆25—Boorde, *Scoggin's Jests*, Tale 53.
- ☆26—G. K. Hunter and David Bevington, eds. *Campaspe and Sappho and Phao*, *The Revels Plays* (Manchester: Manchester University Press, 1999), Act 4, Scene 1.
- ☆27—Boorde, *Scoggin's Jests*, Tale 5.
- ☆28—Anon. *Merry Tales and Quick Answers* (Imprinted at London: Thomas Berthelet, [1532?]), Part I, Tale 87.
- ☆29—*Scoggin's Jests* (1613), Tale 9.
- ☆30—Anon. *Hind's Jests* (London: Printed for J. Deacon, 1657).

参考文献

- 一次文献 (本文中で使用した現代表記に原題を併記した。版の違いについては STC 参照)
- Anon, *A Banquet of Jests*, STC 1368.5
- Anon, [*A banquet of iests. Or Change of cheare. Being a collection of moderne jests. Witty ieres. Pleasant taunts. Merry tales*] ([London: printed for Richard Royston, 1632]).
- Anon, *A Banquet of Jests*, STC 1372
- Anon, *A banquet of jests: or, Change of cheare. Being a collection, of moderne iests. Witty ieres. Pleasant taunts. Merry tales. The second part newly published* (London: printed by M. Flesher for Richard Royston dwelling in Ivy Lane, 1633).
- Anon, *A Banquet of Jests*, STC 1369

- Anon, *A banquet of iests. Or Change of cheare. Being a collection of moderne jests. Witty ieres. Pleasant taunts. Merry tales* (London: Printed [by M. Flesher] for Richard Royston, and are to be sold at his shoppe in Iviie-Lane next the Exchequer Office, 1634).
- Anon, *A Banquet of Jests, Part 1*, STC 1369.5
- Anon, *A banquet of jests: or, change of cheare, the first part. Being a collection, of moderne iests. Witty leeres. Pleasant taunts. Merry tales. Newly published* (London: printed by M. Flesher for Richard Royston, dwelling in Iviie Lane, 1636).
- Anon, *A Banquet of Jests, Part 2*, STC 1373
- Anon, *A banquet of jests: or, Change of cheare. The second part. Being a collection, of moderne iests. Witty ieres. Pleasant taunts. Merry tales. Newly published* (London printed by M. Flesher for Richard Royston, dwelling in Iviie Lane, 1636).
- Anon, *A Banquet of Jests*, STC 1370
- Anon, *A banquet of jests. Or Change of cheare. Being a collection of moderne jests. Witty jeeres. Pleasant taunts. Merry tales* (London: Printed [by Thomas Cotes] for Richard Royston, and are to be sold at his shoppe in Iviie-Lane at the signe of the Angell, 1639).
- Anon, *A Banquet of Jests*, STC 1371
- Anon, *A banquet of jests. Or a collection of Court. Camp. Colledge. Citie. Country. Iests. In two bookes* (London: Printed [by M. Flesher] for Richard Royston, and are to be sold at his shoppe in Iviie-Lane at the signe of the Angell, 1640).
- Anon, *A Banquet of Jests*, WING A3705
- Anon, *A banquet of jests new and old. Or Change of cheare. Being a collection of modern jests witty jeeres pleasant taunts merrie tales* (London: printed for R. Royston at the Angell in Ivy-lane, 1657).
- Anon, *Dobson's Dry Bobs*, STC 6930
- Anon, *Dobsons drie bobbes: sonne and heire to Skoggin. Full of mirth and delightful recreation* (London: Printed by Valentine Simmes, 1607).
- Anon, *Hind's Jests*, WING N1177
- Anon, *No jest like a true jest being a compendious record of the merry life and mad exploits of Capt James Hind the great robber of England: together with the close of all at Worcester where he was drawn, hang'd and quartered for high-treason against the common-wealth, Septemb. 24 1652* (London: Printed for J. Deacon, 1657).
- Anon, *Howleglas*, 10563.5
- Anon, [Here beginneth a merye iest of a man that was called Howleglas] (London: W. Copland, 1555?).
- Anon, *A Hundred Merry Tales*, STC 23663
- Anon, *A, C, mery talys* ([London: J. Rastell, 1526?]).
- Anon, *A Knack to Know a Knave*, STC 15027

Anon, *A most pleasant and merie nevv comedie, intituled, A knacke to knowe a knaue. Newlie set forth, as it hath sundrie tymes bene played by Ed. Allen and his companie. VVith Kemps applauded merrimentes of the men of Goteham, in receiuing the King into Goteham* (Imprinted at London: By [i.e. for] Richard Iones, dwelling at the signe of the Rose and Crowne, nere Holborne bridge, 1594).

Anon, *Mery Tales and Quick Answers*, STC 23665

Anon, *Tales, and quicke answers, very mery, and pleasant to rede* (Imprinted at London: In Fletestrete, in the house of Thomas Berthelet, nere to the Cundite, at the sygne of Lucrece, [1532?]).

Anon, *The Merry Tales of Skelton*, STC 22618

Anon, *Merie tales newly imprinted [and] made by Master Skelton Poet Laureat* (Imprinted at London: In Fleetstreet beneath the Conduit at the signe of S. Iohn Euangelist, by Thomas Colwell, [1567]).

Anon, *The Parson of Kalenborow*, STC 14894.5

Anon, [*The parson of Kalenborowe*] (Antwerp: J. van Doesborch?, ca. 1520).

Anon, *Peele's Jests*, STC 19541

Anon, *Merrie conceited iests of George Peele Gentleman, sometimes a student in Oxford. VVherein is shewed the course of his life how he liued: a man very well knowne in the Citie of London and elsewhere* (London: Printed by Nicholas Okes for Francis Faulkner and Henrie Bell, and are to be sold at his shop in new Fish-streete neere to East-cheape, 1607).

Armin, *Fool upon Fool*, STC 772.3

Armin, Robert, *Foole vpon foole, or Six sortes of sottes. A flat foole a leane foole a merry foole and a fatt foole. A cleane foole. A verrie foole. Shewing their liues, humours and behaiours, with their want of wit in their shew of wisdom. Not so strange as true omnis sunt sex. Written by one, seeming to haue his mothers witte, when some say he is fild with his fathers fopperie, and hopes he liues not without companie. Clonnico de Curtanio Snuffe* (London: Printed [by E. Alde] for William Ferbrand, dwelling neere Guild-hall gate ouer against the maiden-head, 1600).

Armin, *Fool upon Fool*, STC 772.5

Armin, Robert, *Foole vpon foole, or Sixe sortes of sottes. A flat foole, a leane foole, a merry foole, and a fatt foole, a cleane foole, a verrie foole. Shewing their liues, humours, and behaiours, with their want of wit in their shew of wisdom. Not so strange as true* (London: printed [by W. White and S. Stafford] for William Ferbrand, dwelling in Popes-head Allie neare the Royall Exchange, 1605).

Armin, *The Italian Taylor, and His Boy*, STC 774

Armin, Robert, *The Italian taylor, and his boy. By Robert Armin, seruant to the Kings most excellent [sic] Maiestie* (At London: printed for T. Pavier?, 1609).

Armin, *A Nest of Ninnies*, STC 772.7 (The Folger copy)

Armin, Robert, [*A nest of ninnies. Simply of themselues without compound. Stultorum plena sunt omnia. By Robert Armin*] (London: Printed by T. E [ast] for Iohn Deane, 1608).

Armin, *Quips upon Questions*, STC 775.5

Armin, Robert, *Quips vpon questions, or, A clownes conceite on occasion offered. bewraying a morrallised metamorphoses of changes vpon interrogatories: shewing a litle wit, with a great deale of will; or in deed, more desirous to please in it, then to profite by it. Clapt vp by a clowne of the towne in this last restraint, hauing litle else to doe, to make a litle use of his fickle muse, and carelesle carping. By Clunnyco de Curtanio Snuffe. . .* (Imprinted at London: [By W. White] for W. Ferbrand, and are to be sold at the signe of the Crowne ouer against the Mayden head neare Yelehall, 1600).

Armin, *The Two Maids of More-Clack*, STC 773

Robert Armin, *The history of the tvvo maids of More-clacke, vwith the life and simple maner of Iohn in the hospitall. Played by the Children of the Kings Maiesties Reuels. VVritten by Robert Armin, seruant to the Kings most excellent Maiestie* (London: Printed by N [icholas] O [kes] for Thomas Archer, and is to be sold at his shop in Popes-head Pallace, 1609).

Boorde, *The Mad Men of Gotham*, STC 1020.5

Boorde, Andrew, *Merie tales of the made men of Gotam gathered to gether by A.B. of phisike doctour* ([London] : Imprinted at London in Fletstret, beneath the Conduit, at the signe of S. John euangelist, by Thomas Colwell, [1565]).

Boorde, *Scoggin's Jests*, STC 21850.7

Boorde, Andrew, *The first and best part of Scoggins iests: full of witty mirth and pelasant shifts, done by him in France, and other places: being a preseruatiue against melancholy. Gathered by Andrew Boord, Doctor of Physicke* (London: Printed [by Miles Flesher] for Francis Williams, 1626).

Anon, *The 1613 Scoggin's Jests, (Scoggin's Jests, Part 2)*, STC 21851

Anon, *Scoggins iestes. Wherein is declared his pleasant pastimes in France, and of his meriments among the fryers: full of delight and honest mirth* (London: Printed by Raph Blower, dwelling in Lambert hill neare old Fish street, 1613).

Dekker, *Jests to Make You Merry*, STC 6541

Dekker, Thomas, *Jests to make you merie: with the coniuring vp of Cock VVatt, (the walking spirit of Newgate) to tell tales. Vnto which is added, the miserie of a prison, and a prisoner. And a paradox in praise of serieants. Written by T. D. and George Wilkins* (Imprinted at London: By N [icholas] O [kes] for Nathaniell Butter, dwelling neere to St. Austins Gate, at the signe of the pide Bull, 1607).

Dering, *A Brief & Necessary Instruction*, STC 6679

Dering, Edward, *A briefe & necessary instruction, verye needefull to bee knowen of all housholders, whereby they maye the better teach and instruct their families in such points of Christian religion as is most meete. Not onely of them throughly to be vnderstood, but also requisite to b learned by hart of all suche as shall bee admitted vnto the Lordes Supper* ([London: J. Awdely], 1572).

Goulart, *Admirable and Memorable Histories*, STC 12135

Goulart, Simon, *Admirable and memorable histories containing the wonders of our*

time. Collected into French out of the best authors. By I. [sic] Goulart. And out of French into English. By Ed. Grimston. The contents of this booke followe the authors aduertisement to the reader (Imprinted at London: by George Eld, 1607).

Harington, *Metamorphosis of Ajax*, STC 12779.5

Harington, John, *A new discourse of a stale subject, called the metamorphosis of Ajax: written by Misacmos, to his friend and cosin Philostilpnos* (At London: printed by Richard Field [and Eliot's Court Press], dwelling in the Black-friers, 1596).

Laneham, *A Letter*, STC 15190.5

Laneham, Robert, *A letter whearin part of the entertainment vntoo the Queenz Maiesty at Killingworth Castl in Warwik sheer in this soomerz progress 1575 is signified from a freend officer attendant in coourt vntoo hiz freend a citizen and merchaunt of London* (London: s.n., 1575).

Misodiaboles, *Ulysses vpon Ajax*, STC 12782

Misodiaboles, *Vlysses vpon Ajax. Written by Misodiaboles to his friend Philaretos* (London: [by R. Robinson?] for Thomas Gubbins, 1596).

Peacham, *The Truth of Our Times*, STC 19517

Peacham, Henry, *The truth of our times: revealed out of one mans experience, by way of essay. Written by Henry Peacham* (London: Printed by N [icholas] O [kes] for Iames Becket, and are to be sold at his shoppe at the middle Temple gate, 1638).

Perkins, *A Golden Chain*, STC 19646

Perkins, William, *A golden chaine: or The description of theologie, containing the order of the causes of saluation and damnation, according to Gods word. A view whereof is to be seene in the table annexed. Hereunto is adioyned the order which M. Theodore Beza used in comforting afflicted consciences* ([Cambridge] : Printed by Iohn Legat, printer to the Vniuersitie of Cambridge, 1600).

二次文献（アルファベット順、脚注に記載したものは省略した。）

Arber, Edward, *A Transcript of the Registers of the Company of Stationers of London 1554-1640 A. D.* 5 vols. London, 1875; reprinted N. Y.: Peter Smith, 1950.

Brewer, Derek, "Elizabethan Merry Tales and The Merry Wives of Windsor: Shakespeare and 'popular' literature." *Chaucer to Shakespeare: Essays in Honour of Shinsuke Ando*. Ed. Toshiyuki Takamiya and Richard Beadle. Cambridge: D. S. Brewer, 1992. 145-59.

The British Book Trade Index. <<http://www.bbti.bham.ac.uk>>.

Early English Books Online. <<http://eebo.chadwyck.com>>.

The English Short Title Catalogue. <<http://estc.bl.uk>>.

Hotson, Leslie. *Shakespeare's Motley*. London: Rupert Hart-Davis, 1952.

Munro, Ian. "Shakespeare's Jestbook: Wit, Print, Performance." *ELH*. 71 (2004): 89-113.

The Oxford Dictionary of National Biography. <<http://www.oxforddnb.com>>.

シェイクスピア、ウィリアム (Shakespeare, William). 『ハムレット』. 松岡和子訳. ちくま文庫. 1996.

-- 『タイタス・アンドロニカス』. 松岡和子訳. ちくま文庫. 2004.

-- 『ヴェローナの二紳士』. 松岡和子訳. ちくま文庫. 2015.

-- 『十二夜』. 松岡和子訳. ちくま文庫. 1998.

Thomson, Peter. "Clowns, fools and knaves: stages in the evolution of acting." *The Cambridge History of British Theater, Volume 1: Origins to 1660*. Ed. Jane Milling and Peter Thomson. Cambridge: Cambridge University Press, 2004. 407-23.

図版出典

図 1

<https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Paintings_of_jesters#/media/File:Yeames-staunch-friends.jpg>.

図 2

<https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Richard_Tarleton#/media/File:Richard_Tarlton_Pipe_Tabor_c1580s.png>.

図 3

<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Will_Kemp_Elizabethan_Clown_Jig.jpg>.

図 4

<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Robert_Armin.jpg>.